

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102637		
法人名	株式会社ブルズアイ		
事業所名	グループホームありすの家		
所在地	長崎県長崎市椎の木町25番19号		
自己評価作成日	令和5年12月26日	評価結果市町村受理日	令和6年3月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和6年2月28日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

前年度までは新型コロナウイルスの影響による外出、面会制限がありました。新型コロナウイルスが2類から5類に引き下げられ、施設内では感染症対策を継続していますが、少しずつ外出や面会もできるようになりました。家族の顔を見て話ができたり、外泊して家族と共に過ごす時間が持てるようになり、入居者の表情も穏やかになったように思います。ホームではコロナ禍の時と変わらず、日々の過ごし方を大切に、笑い声の絶えない明るい雰囲気を作り出しています。1F、2F合同の敬老会、クリスマス会は芸達者の職員がとても盛り上げています。外出もできるようになり、ドライブをしてあじさい祭りに出かけたり、色々な公園にも遊びに行きました。また、花見やバーベキューも楽しむことができました。当ホームは職員の離職者がいないため、馴染みの職員が継続して入居者様を支えており、深い信頼関係が築けていることも入居者様の安心に繋がっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム近隣の山から、山帰来の葉を採ってきて饅頭作りをしたり、バーベキューやドライブ、日中は体操をしたり、歌や創作のほか職員と一緒に清掃や家事を行うなど、入居者一人ひとりのペースに合わせ、入居者がホームでどのように過ごしたいかといった意思を尊重することを大切にしている。日中はレクリエーションや身体を動かす機会を多く取り入れることで入居者の生活リズムを整え、生活意欲の向上に取り組んでいる。コロナが5類となり引き続き、感染症対策を講じながらも、少しずつ外出や面会の機会も増やしており、入居者の笑顔に繋がっている。職員の離職率が少なく、職員も明るく働きやすい職場であることが窺え、家族、入居者本人との馴染みの関係を築くことで入居者が自分らしく安心して暮らせる場所となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「住み慣れた地域で安心して暮らすことができるよう支援します」「可能性を信じ、ゆっくり待ちます」という二つの理念を掲げている。作り上げた理念の通り、入居者は地域の方が多く、地域密着型サービスとしての役割を果たしている。また、入居者は自分のペースでゆっくりと安心した暮らしができています。	理念はリビングに誰もが分かりやすいよう掲示し、入居者、職員は常に目にすることができる。朝の申し送り時に理念を読み上げることで管理者と職員は理念を共有し、実践に繋げている。重度化した場合でも入居者ができる方法を考え、入居者ができることは自分で行うことができるように職員は待つ姿勢を大事にして急がせないように心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域住民の一員として自治会に加入している。新たに就任された自治会長や民生委員とも交流を持ち、感染症の流行が収まった後には地域との交流を積極的に行っていきたい。	ホームは自治会に加入している。地域の方から畑で穫れた野菜の差し入れがある。コロナ禍前は、中学生の職場体験の受け入れや、地元のお祭りの出し物をホームで披露してもらったこともあった。管理者は感染状況を見ながら地域の消防団とホーム内の避難経路の確認を一緒に行うなど地域との関わりを積極的に行っていきたいと考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	感染症の流行が続いており、地域との交流ができていない状況にあるが、地域密着型サービスとして知識や経験を伝える機会があれば、相談を受けたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和5年度より、対面開催を実施している。会議では、入居者の現状、行事や避難訓練の実施報告、ヒヤリハット、虐待防止検討委員会の報告等を行っており、質疑応答の中で意見や要望を話し合いながら、サービスの質の提供に繋げることができている。	運営推進会議のメンバーは、自治会長、民生委員、家族代表、入居者、市職員、ホーム職員で構成し、2か月に1回開催されている。会議ではホームの取り組み状況報告や、ヒヤリハットの報告を行い、構成メンバーからの質疑応答の内容も議事録に分かりやすく記載し、サービス向上に活すよう取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	生活保護を受給している入居者が多く、生活福祉課とは密に連絡を取っている。入居者の生活の現状を伝え、本人が安心してくらせるよう相談できる関係を築いている。また、地域包括支援センターとも入居の相談や情報交換を行っている。	生活保護を受給している入居者が多いため、行政にはおむつ代の負担軽減などの相談を行った。入居者が安心してホームで生活ができるよう生活福祉課の担当とは日頃より連絡を密に取り、協力関係を築いている。また、地域包括支援センター空室状況の情報交換、市主催の研修会にも積極的に参加している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者の人権を守ることを基本とし、研修を通して職員が身体拘束にあたる内容とその弊害をりかいした上で介護にあたっている。日々のミーティングや話し合いの中で、気づかずに行っている場面がないかを検討し、拘束をしない支援に取り組んでいる。	基本的には玄関の施錠はしない取り組みを行っている。夜間のセンサーマットなどを使用する入居者もいない。身体拘束や虐待防止の委員会や研修を定期的に行うと共に、身体拘束マニュアルをフロアに掲示しホーム全体で身体拘束をしないケアに努めている。	現在、運営規程の中に「虐待防止のための措置に関する事項」を記載すべく改訂中のことであった。今後、上記に関し運営規程への反映と共に、職員や家族に周知し取り組むことを期待する。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者及び認知症高齢者への虐待に関する研修を実施し、理解及び遵守に取り組んでいる。虐待防止のための対策を検討する委員会を定期的に行う結果、または虐待行為を発見した場合の対応方法についても、職員に周知徹底を図っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入居者がいるため、後見人とのやりとり等から制度の理解が深くなっている。職員には機会があるときに説明し、理解できるよう導いている。また、入居後、制度の活用が必要な場合は、関係機関と連携し、活用できるよう支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書、契約書、個人情報保護や金銭管理について説明し、疑問や不安な点を解決しながら同意を得るようにしている。特に起こりうるリスクや看取りについては詳しく説明し、契約に至っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や家族から意見や要望があった場合は、早急に施設全体で話し合い、発生原因を探り、解決、改善して今後の運営の向上に繋げている。運営規程、重要事項説明書に苦情申し立て機関を記載し、外部者にも表せることができるようにしている。	玄関に意見箱を設置をしている。家族が面会に訪れた際に、職員は家族との会話の中で要望や意見を聞き出すように心がけている。また、家族より要望があった際は、敏速にミーティングを行い、解決策をホーム全体で検討し、取り組んでいる。	家族の意見や要望はホーム全体で検討し、運営に反映させている。現在は生活保護受給の入居者が多く、ホーム側より家族等に対し協力を求めたものの外部評価における家族アンケートの回収は難しかった。引き続き、家族等の状況をみながら家族アンケートへの協力が得られるよう取り組むことを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者は直接介護に携わりながら職員と一緒に現場に入り、職員と共に食事を摂る等、日頃からコミュニケーションを図っている。言いにくいとも言えるような雰囲気作りに努めている。代表者や管理者は現場職員の大切さを知っており、働きやすい職場環境を常に目指している。	月に1回の職員会議のほか、検討課題があった際は職員間でその都度話し合う時間を持ち、ミーティングノートにて情報共有を行っている。代表や管理者も直接現場に入っているため、職員の意見や提案を聞く機会も多く、介護方法や声かけの工夫など職員の意見が適宜運営に反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は頻繁に現場に顔を出し、職員の努力や成果を発見できるようにしている。どの職員もストレスを溜めず無理なく働ける環境づくりを目指し、勤務の調整、休憩時間の確保、人間関係の把握に努め、公私問わず悩みや不安を聞いている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験、知識や技能、取得資格や立場に応じた研修を位置づけている。職員が現状に満足することなく質の向上を目指し、外部の研修への参加、更に上の資格取得を目指して取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症サポーターとして、他施設を訪れたり、研修や勉強会を通じて同業者と交流する機会がある。交流の中でそれぞれの良いところを持ち帰り、サービスの向上に繋げている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に必ず本人と面談を行い、本人の思いを聞きながら現状を十分把握するようにしている。環境の変化に伴う不安が早く解消されるよう、入居後は積極的に関わりを持ち、信頼関係の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族等から入居申し込みの相談があった際に、現在困っていること、不安なことについて耳を傾け、入所を前提として話をするのではなく、本人に必要な支援と一緒に考えている。他サービスが必要な場合はそこに繋がるよう支援している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前にホームの見学をしていただき、本人や家族にとって安心できる環境であるかを見ていただき、家族から現状を聞く中で他のサービスが必要であると検討された場合は、そのサービスに繋がるよう相談支援をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者と職員は家族のような関係で触れ合い、時には入居者から優しさや元気をもらうような関係性にある。お互いの感謝の言葉が入居者の励みになり、また職員にとっても励みになっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者と家族の面会の際には、職員と一緒に話の輪に入り、入居者の普段の様子やエピソードを伝えながら笑い合ったり、喜びあったりする姿があり、職員が本人と家族を繋ぐ役割をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居後、本人がホームでの生活に慣れ、ホームでの暮らしを安心してできる本人から感じることができるようになったら馴染みの場所を訪れることができるよう支援している。また、友人、知人との関係が継続できるよう、本人や家族の希望を聞きながらお手伝いしている。	感染対策を行いながら、ホームに訪れた家族や友人達とゆっくり面会ができるスペースを設けている。家族に送るホームだよりには入居者の笑顔の写真を掲載し、ホームでの様子を伝えている。家族と外出したり、正月には家族と過ごした入居者もいるなどこれまでの関係が途切れないよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員全員が情報を共有し、入居者同士の関係性を把握した上で楽しく過ごせるよう調整役として支援している。日によって感情が変化することもあるので、状況に応じた対応をしながら入居者が独り孤立するような場面がないよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も本人や家族との関係性を大切に、相談や支援が必要な場合はホームとしてできる限りのフォローをしている。家族の支援が困難な入居者には、ホームが最後まで必要な支援を継続して行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所から長期にわたる入居者が多く、重度化も進んでいるため、直接本人から希望や意向を把握することは難しいが、本人との日々の関わりの中で表情や言葉、何気なく発する言葉から思いを汲み取るように努めている。	職員は入居者との何気ない会話の中で入居者本人が発する言葉を大事にし、個人記録の気づきの欄に「」書きにして残すことで、職員全員が入居者の思いや意向を共有できるよう取り組んでいる。職員が笑顔で対応することで入居者が話しやすい雰囲気作りを心がけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に聞いたからとそのままにするのではなく、本人との関わりの中で語られる言葉を良く聞き、本人の記憶を引き出すことで新しい情報を知ることがある。また、家族や友人、知人などと折に触れ、情報をいただくようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1日の行動や言動の気づきを個人記録に記入し、1日の暮らしの状況を把握している。今までできなかったことができるようになったり、わからなかったことが理解できたり、小さな変化を見逃さないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者及び入居者家族との普段からの関わりの中で思いを汲み取り、入居者と常に関わりを持つ職員からの情報を基に介護計画を立案している。職員と常に入居者の現状、変化を話し合い、職員の意見を反映させている。	管理者及び計画作成担当者も介護現場の中に入り、日々入居者へのモニタリングを職員と一緒にしながら、介護計画に反映している。介護計画の短期・長期目標や、支援内容を具体的に記載し、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録の個人記録に日々の暮らしの様子やその日に普段と違う言動や行動を記入している。また、申し送りノートを活用し、職員間で情報を伝達、共有しながら実際のケア及び介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在、該当する事例はないが、医療が必要な入居者に対する訪問看護の利用の実績はある。入居者や入居者家族の状況の変化に応じて必要なサービスが選択できるよう、ホームとして協力していく体制を取っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや地域の自治会長、民生委員と情報交換をしていながら、協力し支え合い、入居者が安心、安全な暮らしができるよう日々努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医により、2週間毎の定期的な往診、緊急時においては24時間対応していただいている。また、内科以外の他科受診における医療が必要な場合、かかりつけ医が早急に紹介状を作成し、家族又は職員の支援により適切な医療を受けることができている。	入居時にかかりつけ医に関する希望を本人、家族から聞いて対応している。現在は入居者全員がホームの協力医による対応にて、2週間に1回訪問診療を受けている。緊急時は24時間対応で、職員や本人、家族の安心に繋がっている。薬の変更や受診時の医師の指示などは医療対応の用紙に記録し、職員間で共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームには非常勤ではあるが看護師免許を持つ職員が勤めており、入居者の状態を看護師の目線で見た意見等を介護職員に伝えてくれている。また、協力医療機関の看護師とは良好な関係にあり、心配や気づきを相談しながら、主治医へ円滑に伝えられている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入居者が入院となった際は、受け入れ先の医療機関に必要な情報提供を行い、病院関係者や家族と連絡を取り合いながら本人の病状を把握し、治療経過、受入れ可能な時期を見極めて早期退院に向けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	医療処置及び医療行為が日常的に発生し、訪問看護等のサービスを利用しても入所を継続できない場合はかかりつけ医の判断により退所となる旨を説明し、了承いただいた上で契約をしている。退所と判断された場合、療養型病院等をかかりつけ医と相談しながら検討し、受入れが可能となるまではホームで継続して支援するよう努めている。	ホームでは看取りは行なわない方針で、入居時に家族に説明している。重度化した場合は早めに主治医、本人、家族と話し合いの場を持ち、ホームでできることを十分に説明し方針を共有している。療養型病院への転院が決まった場合は、受け入れ先の態勢が整うまではホームにて支援を継続するよう努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時の対応についてマニュアルを改定し、発生時の対応、救急要請の必要性の有無や手順、救急隊への情報提供がスムーズにできるよう、記録別紙を作成し、状況や対応、経過を詳細に記録するようにしている。また、職員への周知徹底のための研修も行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	月に1回は必ず入居者と共に避難訓練を行っている。訓練後の反省会の中で、不安点が確認された場合は、個別に訓練を実施する等、どの職員も慌てず確実に避難誘導ができるよう訓練を繰り返している。また、1年に1回消防署の立ち会いのもとで訓練を行い、指導を仰いでいる。現在、自然災害の発生時に備えた取り組みを強化して行っている。	毎月1回、入居者と職員が参加した消防訓練を実施している。災害に備え、備蓄は備蓄保管場所に保管し、備蓄一覧表にて管理している。自然災害に関する計画を作成し訓練を実施している。訓練を繰り返すことで職員が自らの役割をしっかりと把握するよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	研修やミーティングを重ね、入居者に対する言葉かけが誇りやプライバシーを損ねるものになっていないかを確認し、改善点を話し合いながら職員の意識向上を図っている。	接遇研修や、日常の支援の中で職員は言葉使いや声のかけ方を意識し、入居者一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけに努めている。理念にある「可能性を信じゆっくり待ちます」の姿勢で、入居者を急がせないような声かけを行い、不適切な対応があった場合は気づいた職員が気づいた時に注意し合うよう心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は入居者との信頼関係の構築に努めており、その中で本人にとって最も信頼がおける職員が思いや希望を聞き、感じ取っている。職員からの決定事項ではなく、入居者に尋ねて行動するような声掛けをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れは作っているが、職員のスケジュールに合わせるのではなく、その日の本人の気持ちを尊重し、好きなときに好きなことができ、それを職員が見守りながら一緒に生活している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で思いを伝える事ができなくなってしまっても、お元気な頃に聞いた本人の好みでおしゃれができるようお手伝いをしている。外出の際には、お化粧をしたり、普段と違うおしゃれを楽しんでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は給食や配食ではなく、職員が手作りをしている。献立を決める際には入居者から食べたいものを聞いて作ったり、行事等を利用して特別な食事を提供したりして食事が楽しいものとなるように支援している。また、お手伝いできる方にはできる作業をお願いし、職員と一緒にやっている。	食卓には職員の手作りの食事が並び、長崎名物「トルコライス」もよく提供されるとのことであった。レクリエーションを通じた会話の中で、入居者より好きな食べ物や食べたい物を聞き、メニューに反映することもある。誕生日には赤飯、時には庭でバーベキューを行うこともある。食事を楽しめる支援を行う中で、入居以前は食事を摂ることがままならない方が、現在は完食している事例があるなど、食事にも注力していることが窺える。	